第１３課　塵から星へ

【暗唱聖句】

「目覚めた人々は大空の光のように輝き、多くの者の救いとなった人々はとこしえに星と輝く」ダニエル12：3

【日曜日・私たちの君のミカエル】

**「その時、大天使長ミカエルが立つ。彼はお前の民の子らを守護する。その時まで、苦難が続く。国が始まって以来、かつてなかったほどの苦難が。しかし、その時には救われるであろう。お前の民、あの書に記された人々は。」ダニエル12:1**

「その時」というのは、ダニエル11:40から語られている「終わりの時」のこと指しています。つまり地上歴史の最後の瞬間です。その時何が起こるのかというと、「大天使長ミカエルが立つ」というのです。そして「神の子たちを守」ります。これはキリストのご再臨を意味しています。そのことがよくわかるのは、「かつてなかったほどの苦難が」来ると書かれてあることです。この表現は、イエス様ご自身が世の終わりについて述べられた言葉と一致します。

**「そのときには世界の初めから今までなく、今後も決してないほどの大きな苦難が来るからである」マタイ24:21**

「しかし、その時救われる」のです。大いなる苦難をくぐり抜けて救われるのです。しかし、わたしたちは耐えられるでしょうか。するとイエス様はこう続けられました。「神がその期間を縮めてくださらなければ、だれ一人救われない。しかし、神は選ばれた人たちのために、その期間を縮めてくださるであろう」（マタイ24：22）。いまだかつてなかったような苦難が、再臨直前に必ず起こります。しかし、主は選ばれた者たちのために、その期間は縮めてくださるとの約束です。わたしたちは一つとなって、苦難を耐え忍び、キリストのご再臨を目撃するのです。

【月曜日・あの書に記された】

**「また、わたしは大きな声が神殿から出て、七人の天使にこう言うのを聞いた。「行って、七つの鉢に盛られた神の怒りを地上に注ぎなさい。」ヨハネの黙示録16章1節**

再臨直前に起こる苦難は、人類に対する神の最後の裁きです。「神の天使たちが、人間の激情の激しい風を抑えるのを止めると、争いの諸要素がことごとく解き放たれる。全世界は昔のエルサレムを襲ったものよりも、もっと恐ろしい破滅に巻き込まれる」（各時代の大争闘下巻368ページ）のです。　しかし、そのとき「あの書」に記された人々は守られ、救われるのです。あの書とは、いのちの書のことです。イエス様は「悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではならない。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」（ルカ10：20）と言われました。わたしたち救われるものたちの名前が天に書き記されているのです。その書物のこと、「命の書」と表現しています。（「二人は、命の書に名を記されているクレメンス…」フィリピ4:3）

【火曜日・復活】

**「多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める。ある者は永遠の生命に入り、ある者は永久に続く恥と憎悪の的となる」ダニエル書12章2節**

ここに復活について書かれてあります。旧約聖書の中では最も明確に復活について語っている箇所と言って良いでしょう。復活のことを、眠りから目覚めると表現しています。死の状態は、魂だけが意識を持ちながらどこかに存在しているのではなく、眠っているように無意識の状態にあることを象徴しているのと同時に、眠りから覚めて朝目覚めるように、死の状態から目覚めて復活の朝を迎えることができることを象徴しています。また、塵の中から目覚めると書かれてあるのは、創世記3章19節の「お前は顔に汗を流してパンを得る。土に返るときまで。お前がそこから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に返る」との御言葉に対応しています。さらに、ここに書かれている復活は、第一の復活と第二の復活の両方があります。キリストが再臨されるときに永遠の生命に入る復活は第一の復活であり、永久に続く恥と憎悪の的となるというのは、1000年期の後の第二の復活のことで、それぞれの行いに応じて報いを受けるために復活し、永遠の滅びに至ります。

　「現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないとわたしは思います」（ローマ8：18）とあるように、再臨の前に多くの苦難があったとしても恐れることはありません。あるいは再臨前に限らず、人生の中で様々な困難に直面したとしても、その後に待っている栄光に比べれば、取るに足らないのです。その栄光は死から復活したそのときから始まるのです。

【水曜日・封じられた書】

**「ダニエルよ、終わりの時が来るまで、お前はこれらのことを秘め、この書を封じておきなさい。多くの者が動揺するであろう。そして、知識は増す。」ダニエル書12章4節**

主はダニエルに、「終わりの時が来るまで、お前はこれらのことを秘め、この書を封じておきなさい」と命じられました。これは理解されないままにせよということですが、このことから預言書は必ずしもすべての時代の人が理解しなければならないわけではないことがわかります。理解したくてもよくわからないのです。しかし、時代が進み、終わりの時が来たとき、知識が増して理解できるようになります。終わりの時代に生きる人たちが知らなければならないからです。目が開かれるのです。しかし、その時多くの者がこの預言の言葉を理解して動揺するのです。最後の審判という厳粛な時が差し迫っていることを知るからです。実際に、このダニエル書は何世紀にわたって難解な書でした。今でもある人たちにとっては難解なままです。しかし、終わりの時、目が開かれてくる人たちが起こされるのです。セブンスデー・アドベンチスト教会が、終わりの時にダニエル書の理解から起こされた教会であるということは、偶然ではないのです。

【木曜日・待ち時間】

**「わたしダニエルは、なお眺め続けていると、見よ、更に二人の人が、川の両岸に一人ずつ立っているのが見えた」ダニエル12:5**

ダニエルは再び最初に幻を見た川に戻ってきます。ただ、この川はチグリス川ではなく、ナイル川を現わす言葉が使われていることから、出エジプトの救いを想起させます。2人の人とは2人の天使ですが、「その一人が、川の流れの上に立つ、あの麻の衣を着た人に向かって、「これらの驚くべきことはいつまで続くのでしょうか」と尋ねます（12:6）。すると、左右の手を天に差し伸べ、永遠に生きるお方にむかって誓います。これは最大の厳粛さを現わしています。そして、「一時期、二時期、そして半時期たって、聖なる民の力が全く打ち砕かれると、これらの事はすべて成就する」と言われます。これまで繰り返し出てきた1260年の預言です。ダニエルには理解できなかったので、「主よ、これらのことの終わりはどうなるのでしょうか」（12:8）と尋ねます。しかし主は、「ダニエルよ、もう行きなさい。終わりの時までこれらの事は秘められ、封じられている」とだけ答えられます。そして、付け加えるように、「多くの者は清められ、白くされ、練られる。逆らう者はなお逆らう。逆らう者はだれも悟らないが、目覚めた人々は悟る」（12:10）と言います。この言葉は黙示録22:11の「不正を行う者には、なお不正を行わせ、汚れた者は、なお汚れるままにしておけ。正しい者には、なお正しいことを行わせ、聖なる者は、なお聖なる者とならせよ」の言葉と似ています。終わりの人々の特徴です。

「千二百九十日」とは、ゲルマン民族で最も有力だったフランク王国の王クロビスがカトリックに改宗した508年からフランス革命の1798年までを指し、「千三百三十五日」とは、終わりの年が1843年となり、ミラーライト運動の開始と重なります。ただ、はっきりしとはわかりません。

ダニエル書の最後の言葉は、**「終わりまでお前の道を行き、憩いに入りなさい。時の終わりにあたり、お前に定められている運命に従って、お前は立ち上がるであろう」（12:13）**です。自分に与えられた分を生きれば良いのです。そうすれば憩いに入ることができます。